

飾馬考

上卷

和書門			
一	七	三	九
二	一	六	二
二	九	六	二
冊	架	函	號

547

庫文閣内		和書
一	七	三
四	三	九
七	二	二
函	冊	號
一	架	類

内閣文庫	
番號	和 17392
冊數	2 (1)
函號	147 547



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

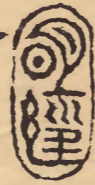


的場勝美翁著

飭馬考全三冊

三書堂藏

捨舊喜新人之常情也
俗態之訛風習之變因
是而生遂至併禮典
之器用有缺而不具正
而不完是以雖有好古
之徒亦沿華生真補修



淺草文庫

花廬家文庫

傳謬而不免求金之數豈
非遠憾耶儀馬之具有
唐鞍和鞞移鞞水干鞍
及六位鞍等名而古今訛
妄猶有名義形狀不詳
者茫城の場勝美未素
邃國學兼涉漢籍嘗

修儀馬一書溫故知新
總驗名實加以注解并
附諸家秘圖欲使學者
老法疑而知古範也余
聞伯樂一顧馬價十倍
今此書實為邦典必用
梓行于世則如名驥騰

驍橫行天下其價當十倍
矣嗚呼揚美者使人無
遺憾者乎

嘉永三年冬十二月

從二位清原宣明題



的場勝安以以以

錦馬考以以以

正三位有幼

書之凡以以

かきまゝに

しるべきもの

しるべきもの

しるべきもの

凡例

○此書ハ中昔より此方世に聞ゆる鞍馬の名等を擧げ先是が名義を註し。次小鞍具の製作を明辨せる也。抑世に鞍馬の飾を註釋為る物。此彼あるといへども。皆其の大畧を擧げ。委曲は是を註せる物を見せ。然るを唐鞍の如き。其具の多く多ある物ハ。數書を合せて考へざる。熟其皆具を辨へ難き小似あり。故に今此間小載る處ハ。普く諸書に通考して。多不其書等小漏たる物ハ。今世に用ふる所を尋ねて載つ如此了愚考の及ぶざる旧説に極免難き物ハ。朋友の考を互交へて註せり。

○唐鞍の名義を辨ざる小至る。異邦の鞍具を参考するハ。

漢籍カラブミ小見る所を證アガシして。世ヨ以カ唐画カラエの類ハ取らざ。然サる多其唐画カラエと稱する物。實コト小西土人カラの画ガなる小や。又ハ此國ヨして物キなる小や。詳サカ小ハ辨へ知らせぬを能カふ世ヨ也。

○諸鞍日記小御幸鞍ヤマトクラとて載たる物ハ。倭鞍ヤマトクラを如シカ是云ふらむと思ふ由あり。然サ世ヨなる近頃伊勢貞丈シユの註シユとせたる。此日記の考註コウシュと以カふ書キハ。是を倭鞍ヤマトクラの余ホカ小見らむたせバ志シをらと別ワ小舉トと思ふ所を註シュせよ。

○此書小飾馬の圖を見ミせるハ。其飾るやうを童蒙ロラハミ小知らぬめんが為ナり。又卷中小註シュせる。大和國東大寺若宮ハ幡社藏の唐鞍移鞍トクを初ハジ也。諸社の神馬カミウマ小用ふる古き鞍

具の類。また春日社ハチ神カミ殿ミヤふる飾馬の繪エふどハ。其圖の既ハヤく物モノ小見えぬを。今ハ然サるたゞオキ省シて未世ミタ小流布ホトコらぬ古き繪ドモ等ト小。或人の持モ有トし移鞍トク皆具カのヨも或加へて卷マクの終トク小附ケつ。たゞ右ミ鞍具カキの中ナカ小。貫鞞クワン渡皮ワタ忍肌ニシ付ケふと云類の物モノハ。画カキ樣サマのいさゝの違へる處有アり如くも思オモゆる世ヨ。此鞍ハ今世イマ播紳家ハヤシの外ソト小ハなま物モノ小。我輩ワガタの親オヤしくハ常トコ小見る事を得エせバ。其コノまきキも其善惡ヨシアシとくも辨へ難ガき小ナり。志シはらハ原モトの儘ト小画エて見ミむ人の訂正を待マてる也。

○此の次序ツイデ云此書未草稿ミタカキありしやと故有ユて京ミヤトの何某小見せ置オキつる或人の密ヒソカ小撰ウツシ寫シ出デて世ヨをシる

為^{ナセ}るハ概^{サシタ}キ事^{ワザ}不利^リ故^コニ今^{イマ}あ^ラら^ズナ^リ訂^リ正^スを^シ加^ヘ考^カ註^シを
 増^マ減^シして^テ正^シ本^ヲと^シ然^ラニ^シ草^カ按^ヲの^ヲ書^シ持^テた^ラむ^人ハ^ハ必^ズ也^ナ
 易^ク見^ル給^フ不^レ也^ナ

飾馬考上卷目錄

唐鞍 鈴唐鞍

鞍槁

韉

大髯脊

鞍褥

鞍靶

鑣

手綱

鐙

逆靷 鐙靷

鞞

當面 當胸
下敷

鞍

銀面 菖蒲形

角袋

頸總

杏葉

攝蝶

八子

雲珠

腹帶

表腹帶

鈴 腹鈴

尾鞞

差繩

藥袋

鞭

唐鞍飾馬圖

和鞍

鞍槁

切付

○飾馬考上目錄

○一

御幸鞍	差繩	四保天	逆靱	銜	鞍褥
皆具不詳					
	鞭	腹帶	貫靱	手綱	鞍靶
	和鞍飾馬圖	表腹帶	鞞	鐙	障泥 大滑

飾馬考上卷

淀藩 的場勝美考註

皇朝小馬戎飾事ハ何の頃より有初けむ。日本書紀推古天皇紀ミマキ十六年秋八月辛丑朔癸卯唐客入京是日遣飾騎七十五足而迎唐客於海石榴市衢ツバキ有て。又同十八年冬十月己丑朔丙申新羅任那使人臻於京是日命額田部連比羅夫シノヒシラキニミナノ為迎新羅客ヲカサリウマ莊馬之長以膳臣大伴為迎任那客莊馬之長カサリウマ記されたる是ハ朝廷ミカド飾馬を取アツカ取アツカ給へる事の物に見えたる始也。如是て其飾り如何なる製の物ぞいふ。上代の鞍具ハ詳サシカふ記せる物を見ざれば。右の推古於大御世オホミヨふと用ひらヒラせしむ。いふなる状サマの物モノを里サトけむ。さうよ考る便タマシふし。

飾馬考上

いへども試ふ云々。ふは今の唐鞍は如き物よみせ有め。如是
思故ハ。和名抄鞍馬具部小。辨色立成。楊氏漢語抄云云甚古
世に書等を引て。載られたる鞍具の中。今に此鞍の飾小用
ふ。杏葉雲珠云々。云名も見えたる也。然る中昔より此方
普く世に用ふ鞍馬の品。諸の書籍に見る處種々あり。然ハ
阿耨多羅三藐三菩提。結鞍御共鞍云々。云類の物ハ。いまの
世に聞えざるありて。鞍具の詳ならざれば。然るたぐひの物ハ。
僅よ其見る所を擧て。聊愚考を註をなす。

唐鞍 鈴唐鞍

延喜左馬寮式。凡蕃客乘騎唐鞍。寮家掌收。若有壞損。隨即修
理。凡雜鞍者。十年一度作替。五十具。其十具用舊。槁但唐鞍。

者隨損臨時申官修理と云々。唐鞍と云名の物も見えあるハ
是始ある也。のく名義を按る。是ハ其皆具は唐風ハ爲
ふ故也と云説ある。然らば異邦の鞍馬乃飾も大抵ハ此唐
鞍の等あるべき。諸の漢籍にも見る處も。蔡邕獨斷金
鍔馬冠也。高廣各五寸。上如三華形也と云る。銀面は菖蒲形
も似ると。考聲切韻。紛所以鞞馬尾也と有物。此飾小用ふ
る尾袋の類もやと覺ゆる。乃と云る。其餘ハ是等しき物を
見。又按ハ凡西土の馬は飾ハ。障泥を用ふる。夏の西京雜
記。唐韻云。凡見えり。然るに此鞍實ハ唐風也。摸寫せる
物ありむ。ハ。必此具をよせハ用ひぬ。其支ふは如
何。云々。云。ハ。是ハ鞍槁を見る。自來皇朝の制ある。夏云

をさす也。然を此一ふと里了る。皆具を唐風ふ爲ると能説
多信難あるを

車服制度手記唐鞍の條の右に鞍橋或西土の制の習へる物の

如く註さるるハ其製作を考へ給ふべし是ハ俗

朝鮮鞍と稱する鞍橋乃類を然ハ云ふは思ひ誤

里給へるふるを。抑鞍といふ稱ハ伊勢氏貞既云

しおとく是ハ其皆具を統云名ゆ。如是名付る義ハ馬上

小座を設る具ふを云座を父良と唱ふる例ハ千座盤座

高御座多ふと旧火多多く見えある。然を此唐鞍を始凡了

鞍馬の名ハ何鞍と稱する物ハ皆其飾を云名ゆ。鞍橋一

枝指多ふ何る也。然を轉多りて鞍橋を。又鞍と

以ふと混多了。今世ハ鞍と云ハ鞍橋の或は如

く思へる人多くある。其ハ和名抄ハ鞍と鞍橋を別

ふ出さるるを辨ふ

是以了見の時ハ此鞍全唐風或馬せ物ハをある。金鍔尾

韜類のあり似る。俗ハ云閤合ある。和漢自づの

其製ひとしき物ハ幾許有也。然るを伊勢氏ハ書れる

物ハ。唐鞍ハ馬の装束を唐風ハ爲る也と有。其飾ハ

皇朝の鞍橋或用ふ或ハ不審とも云ふ。凡我朝の禮樂

制度官位装束を始皆唐風を學び用ゐる物なれども。

唐に或は少く改む。其儘用ひらる。唐を本ゆして

斟酌消息して。更ハ制度を立らるれば。諸唐ハ似る同し

からざる支ありと云、きしハ強言也。いこのふやふきバ。其禮樂
制度皆唐の據了然も斟酌消息せしきたる物。何の唐某と云、
をみせあり免さる例一も有ぬがうへ。正しく唐朝の制は依
きもる禮服朝服をまろ。唐某ふどハ云ざるをや

禮服を自来本朝の制也と云説ハ委らむ。十二章ハ全他
邦の制ふる支云もさら也。わく異邦の制を改む。其儘用ひ
らき一ばふ。唐某としも云、されむ。此鞍もとへ唐風を摸
寫せるふもあき元來皇國の制ふる鞍槁をて飾せるを。如
何り唐の鞍といひらん。とく思ふ處し

然らバ唐鞍といひのふる義せと云ゆ已が按處ハ既ハ註せ
る左馬寮式ハ蕃客乗騎唐鞍と見えもきむ。是ハ古へ唐客ハ
乗志免らきし鞍ふ故ハ。然ハ名付たる物ふらむ。小泉保
敬ハ昔時何ふも。世ハ一際清く勝る物を稱し唐何と
云し支あり。其ハ唐珠唐衣唐匣の類也。さる其唐ハ借字ふ。
明の意ふる。明ハ穢きの反對ふ。是即清く勝る物
を以ふ。然を此馬の飾も他ハ勝る美麗しく。見處ある物
ふきバ。唐鞍とハ云ふる。式ハ唐櫃を明櫃と書
あるハ據る時ハ。此説を後しきも考ふ。さる此鞍ハ諸
鞍日記ハ御襖行幸の時。郎下左大臣一上の乗鞍也。又賀茂祭
の使ハ乗也と云里

御襖行幸ハ。踐祚の大嘗會行ハ。せんとの十月。鴨河の邊、
小幸し了御襖為させ給を云。後成恩寺殿の御記ハ。是

豊禊トヨノミヤギ云俗ハ河原御禊ト云由見え多事。郎下左大臣トハ。右の行幸御先立る。郎旗の下モト供奉給へる故ハ云玉藻。建曆二年十月廿八日。此日天皇臨鴨河修禊郎下左大臣良輔也。左大臣起座出宣仁敷政等門。經宣陽春華。兩門向標下畢。件標建禮門南去十九丈立郎旗標南去一丈立郎下左大臣標トあり。上ハ職原抄ハ官中、支一向左大臣統領故云一上ト見え。郎旗ハ天仁の江記ハ騎馬者持之。以緋綱四人張之。件旗上三股如山字ト見えあり。

抑御禊行幸の日。此鞍ハ乗る人ハ郎下大臣のトあり。次弟司、長官、次官、及供奉の諸卿ハ是を用ひらる事有例を云。保安四年の師元記ハ今日攝政已下諸卿各唐鞍。又西宮抄ハ大嘗會御禊。公卿各唐鞍ト見え。天仁、江記ハ次弟司、長官、按察使中納言手振云々唐鞍。次官、式部、少輔、大江、有元平絹云々。

唐鞍。又師元記仁治三年御禊の條ハ。次弟司、長官、次官、唐鞍ト見え多事。然きを諸鞍日記ハ郎下左大臣一上の乗鞍也ト云る。一上のトハ乗るトハあり。賀茂祭の勅使乃此鞍採用ひらる。又公光卿記仁治三年御禊の條ハ。郎下右大臣實經シカク云々。鞍号鈴前。關白被借進ト云。又兼光記ハ攝政殿御騎馬令用鈴唐鞍給ト見え。此鈴唐鞍ハ以のふ。或播紳家の所傳ハ杏葉ハ鈴ハ附たふを云々ト也。或人ハ云。さる。或人ト云。知入ト尋ぬ。

唐鞍具

鞍カサネ 黒鞍カサネ 鏡鞍カサネ

延喜式小鞍橋一架と見え和名抄小楊氏漢語抄云鞍橋久良保祢

一云鞍瓦と見え多里。按小鞍瓦ハ日本書紀推畧小鞍瓦後橋

と書了。久良保祢乃之都久良保祢訓と訓オ類聚名義抄小

鞍橋クハラ一瓦訓と註一多里を。鞍瓦ハ久良保祢と云金云

久良加波良と註せふ物阿る多。古言を辨ぬ人の字能儘小訓

を付ふるふる金。名義ハ鞍骨乃義を利

軍器考鞍橋の條右鞍橋鞍瓦の更云論云了日本紀小鞍前

後橋とも又ハ鞍瓦後橋とも見え多金。鞍橋と云ハ今云

前後の輪云了。鞍瓦ハ居木とも由木とも云物云と云

世ハ書紀の文義を多里損云也惑云也云

かく了此飾云用ふる鞍橋の制。諸鞍日記云云慶云形云移云同

但黒鞍也と見え多里。移とも移鞍を以云。黒鞍ハ黒地の橋云

具を摺云玉云と云入云る物云る云。多云公光卿記云馬云黒

毛唐鞍借用前黒地摺具又正應元年十月の御記云飾馬黒

螺鈿と有了。飾抄云是云が鞍橋を註云る云。螺鈿入玉

と見え多里。螺鈿ハ俗云云金貝の更也

一説小黒鞍ハ無文の黒漆を以云。黒地ハ文有云物を以云と

云里。以云の云其差別有云。思云る云。古云ハ云唐鞍云

無文の黒漆橋を用云ひ云る云。更云ハ。物云見云え云る云。葉

黄記云。黒鞍有赤銅伏輪と見え多里。古云ハ云文有云物を云

ふち黒鞍とハ云リ也

又信範記。康治元御襖の條ハ。郎下左大臣殿云々。御唐鞍鏡と有リ。飾抄ハも。保安御襖。攝政鏡鞍と見えルも。鞍橋の面ハ金銀赤銅の類を張リ。鏡ハ如く磨きス。或は以テふ。さるハ或物ハも。金ヲをふキ張つキ。磨リぬキ。鏡と云フ。如く注シるハ。委シのハ。其由ハ和鞍の下。金地銀地ハ條ク云フ。

鞵シタクラ

和名抄ハ唐韻云。鞵ハ亦作鞵ニ和名ハ鞍鞵也と有リ。桃花藥葉ハ物具装束抄ハとハ。切付同ハ。支の由を註セるハ。名義ハ鞍下

小用ハ具ハあるハ故ハ。下座ハの義ハ名付ル也。故ハ常ハ下鞍の字を用フ。切付ハ虎豹の皮ハとハ切裁リ。附キ云フ。但此切付と云名最古ハハ聞えぬハ。鞵ハ既ハ日本書紀ハ見えル也。是ハ此飾ハ用フ物ハ。信範記。壽永元年御襖乃條ハ。攝政殿御唐鞍云々。下鞍ハ紫檀地螺鈿ハ鏡地ハ孔雀縫物ハ金物付ハ下とハ。阿ハ。按ハ紫檀地螺鈿とハ。地ハ紫檀の状ハ塗リ。金貝ハとハ。摺ハ。あるハ。思ハ。近ハ鴨祭ハ。勅使ハ唐鞍ハ。紫檀の木ハして作ス。下鞍を用フ。或ハ卿曰ク。一ハ。然ハ。是ハ見エるハ。真ハ乃木地ハ。有リ。鏡地ハ孔雀縫物ハ。長秋記ハ唐鞍ハ具ハ註シるハ中ハ。那ハ女鏡と云フ。あハと有リ。其ハ鞍橋の鏡地ハ同じく大滑ハ面ハ金銅ハ或ハ白銅の類を張リ。鏡の如く磨きス。或ハ云フ。さハど此間ハ。孔孔雀縫物と云フ。是ハ革地ハ薄を置キるハ物ハあるハべし。

○飾馬考上

薄ハ續日本後紀ハ禁金銀薄泥ト見え。又延喜彈正式ハ凡金銀薄泥不得爲服用并雜器飾但五月五日諸衛府甲冑飾不在制限ト有古ハ今ノ如ク猥小用ふる更を得さ里し也。其縫物ハ色絲を孔雀乃形を置ふる。真の縫物ト異ふる。今も京御靈社の唐鞍ハさる製物有ト或人ハ云里。かくて金銅伏輪二重掛之ト多。紫檀地ト鏡地の二重ハ掛る。ゆや。金銅ハ俗云滅金の類也。様物云々トハ。銀の薄泥をぬりふるを様物ト云。其彫物ある。下鞍の縁ハ附ふる。其ハ飾抄の大滑ハ透金物を附ト有。同。然。此注鏡地已下ハ。凡大滑の製を云る物ふる。様物彫物金物付下鞍縁ト有。本文ハ下鞍ト有。ハ。絲をしまが如くなき。下鞍大滑ハ共小鞍下の具。其合用ふる物ふる。故。下鞍ト云。ハ。自づら大滑の上ハ通ぐる。分。ハ云。又公光卿記唐鞍具ハ左蹕ト称る物ある。按。是ハ常ハ左筆ト書。下鞍ハ虎の文。画ける物。然。是号更の義ハ。移鞍左筆切付。條云。又長秋記唐鞍具ハ豹韉ト云。見。大廩脊

和名抄ハ。蔣魴切韻云。廩和名奈女鞍下廩脊也ト云。是ハ所謂ハハ付の更也。名義ハ此具飾馬小用ふる。勝。大。故。大廩脊ト云。奈女ト馬の脊ハ觸。其義ふる。故。常ハ大滑ト書。ハ。有。然。其製

大廩脊

和名抄ハ。蔣魴切韻云。廩和名奈女鞍下廩脊也ト云。是ハ所謂ハハ付の更也。名義ハ此具飾馬小用ふる。勝。大。故。大廩脊ト云。奈女ト馬の脊ハ觸。其義ふる。故。常ハ大滑ト書。ハ。有。然。其製

ハ。飾抄大滑の圖ハ註し了云。徳大寺借請唐鞍寫之。大滑三重有伏輪二重付透金物端三十六。次二十六。と有了。さる車服制度手記ハ云飾抄の大滑ハ三重層付と見え候二重切付を見え候歟。壽永の摂政所騎二重と見え候二重と申時ハ。一ハ肌付。一ハ切付候飾抄の三重と一ハ切付候云々今按ハ大和國東大寺若宮八幡宮寶庫ハ古制の唐鞍有、其圖の物ハ出るふを見るハ此大滑も三重と覺しく伏輪を三段ハ懸了上段白銀の鏡地ハ一ハあるハ。金銅を了唐鳥の形を置き中と端と段共ハ金地ハあし了。同金の透金物をおより中心ハ華ある由物ハ見ゆ又正應元年の御記ハ。繡の大滑と云名を見えある。是ハ南都春日、神殿間板ある。唐鞍飾馬の繪ハ大滑ハ花鳥を画きた。美麗ハ彩色ハ加へある。是繡の大滑あるハ繡ハ多和名抄ハ蔣紡切韻云繡ハ和名沼無毛乃以五色絲刺萬物状也とある。李縫物を沼無毛乃と云ハ。音便を了唱ふる也。

春日の神殿の繪多。後三條院の御世ハ画る由あるを。唐鞍の古制を考ふるハ。必是等ハ據ある也。然るを軍器考ふる春日、社ハ諸ハ。神殿の繪馬ハ画きし所を見了。年ハ後疑ハ解ぬる支ありと云せき。

鞍褥

和名抄ハ揚氏漢語抄云。鞍褥ハ久良之岐。俗と註然者ハ記録とるハ表敷と見え多きと。正しくハ久良之岐と云あるハ。名義ハ。鞍上ハ敷物故ハ云然了此飾ハ用ふる物ハ飾抄ハ

表敷錦と見え東大寺八幡の唐鞍あるも始ハ生皮ふまじ紙。
後ハ大和錦を以て包免る由物ハ見え今賀茂祭の勅使御用
ひらふく處ハ大和錦の由ふきを古々唐鞍ハ全錦を用
ふるぬる處ハ但獨窠錦をてたる夏冬禁めらふくし。彈正
式ヲ見えある是ハ大神宮御神寶あるゆゑある處ハ又長
秋記ハ表敷紺地繡人車記ハ縫物表敷ハ筋ヲふぎる見ゆ。繡
の夏冬既ハ云里。瓔珞ハ種々の玉を緒ハ貫了下を以て日本
紀安閑ハ廬城部連根菩喻ハ女幡媛ト云るが。物部大連尾輿
の瓔珞を偷了。春日皇后獻里し夏冬ど見えある。是始ハ佛ハ
頸ハ纏へる。玉の飾を云名ハ了。佛書ハ多ある物ふき。其一二
紙云ハ法華經弟廿五。普門品云。无盡意菩薩云々。即解頸衆宝
珠。瓔珞價直百千兩金而以與之云々。又云。仁者惡我等故授此
瓔珞。多佛本行經ハ以香塗身。瓔珞莊嚴云々。ふども云。是
多鞍褥の何處ハ付あるハ考ふ處し。

鞍クラオホヒ 鞍カ 鞍カ

和名抄ハ揚氏漢語抄云。鞍カ 鞍カ 鞍カ 保タ 良カ 於カ 是ハ鞍カ 搗カ を覆ふ
物故ハ常ハ鞍カ 覆カ といふ。延喜彈正式ハ云。凡大臣以上覆
鞍者用淺紫參議已上深緋。諸王五位已上綠色。諸臣黃色。六位
已下不得用。左馬寮式云。凡行幸御馬鞍カ 鞍カ 深紫綾一條。
長シカ 尺云々。是を鞍カ 搗カ 掛カ あり。状ハ土佐光長が画。年中行
夏唐鞍の繪ハ見えあり。然了管見記。文保二年十月廿六日。記
ハ又馬二疋。大臣殿御分。予ハ唐鞍二口云々。紗鞍カ 覆カ 同鞍カ 見

え。長秋記ハ。鞍履薄物有繡トある。此薄物ハ穀コりるル。車服
 制度手記云。治承三年四月廿一日山槐記ハ。賀茂祭使右少将顯
 家朝臣引馬掛青紗鞍履ト候。物具抄ハ。透鞍履スキ
也。緒ヲ繪以色色ノ。候云々シカク是ハ據時ルハ諸モロクの記録ハ。透鞍履ト
糸唐鳥唐花縫之見え多ふハ。穀紗ノ類ハ。志ハ名付ル義ハ。鞍槁ノ透リ見ル
也。然キバ諸鞍日記考註ハ。透鞍履ハ穀ノ薄物を以テ作
成る由註シさキ多ク。此絹キ。和名抄ハ。釋名云穀ハ古ノ其形チ
緘々視之如粟也と註ス。新撰字鏡ハ。古女ノ乃幾奴ト訓ス。是
 今ハ六位の人ノ着ル處ノ袍ハ地也ト云人ハあれド。六位の袍ハ
 地太ハ薄物ノ穀ト少イ異カ。紗ハ四聲字苑ハ。似絹ニ
 太ハ輕薄也ト云キ。又花内記ハ。攝政鞍履被用ハ。葡萄漆ハ是寛治大
 殿例也ト見ス。寛治時範記ハ。攝政殿ハ御鞍履ハ令用
 葡萄漆トある。此例ハ。葡萄ノ實ノ熟ス。似ル。是ハ江比
 多ク物ハ。譬ハ。葡萄ノ實ノ熟ス。似ル。是ハ江比
 と云事ハ。書紀神代卷ハ。伊弉諾尊ニ投テ黑鬘ト是即成葡萄ト
 有リ。和名抄ハ。揚氏漢語抄云。葡萄ハ衣比加豆ト註ス。名義ハ
 是ハ蔓ノ鬘ハ。似ル。是ハ和訓ハ。云キ。又打鞍履ト
稱る物ハ。其ハ公光卿記。物具装束抄ハ。見ス。又信範記
ハ。濃ハ。今加茂祭ノ勅使ノ唐鞍ハ。又御靈社ノ飾
 馬ハ用ル。此物也ト云キ。名義ハ。面ハ濃ハ。裏ハ蘓芳
 抄ハ。故ハ濃トハ紅トを黒ト許ハ。漆ハ。蘓芳ハ和名
 抄ハ。蘓敬本草註云。蘓ハ。須ハ。人用ハ。漆ハ。色ハ。

鑣タツナ

和名抄小説文云。鑣タツナ訓久都波美馬銜也。註云。名義ハ馬口小喰クハミる物モノなる故。口喰クハミの意。俗語の久々美ハ含フクミふ。いまも口中の物を含フクミむを久々半クハハといふ。常の事なり。また延喜式小是を久都波クツハと訓。新撰字鏡ニハ。久都和クツハと有る。今も志の唱ウタる義ハ口輪クハワの意也。和訓栞ニ云。伴生トナリと。是ハ口喰クハミの畧言也。久都和クツハとある。字鏡の假字カナハ誤アヤりたる也。如是カク此飾カク里リ用ヨウふる鑣タツナの制飾抄ニ見る處ハ輪ワ无銜クツハといふ物モノ也。其形ナ袍ホの文ナ。輪ワ無ナシ小似ニる也。云イハる也。尾張國オウヱ鞍田アサノの神馬小用ヨウふる。唐鞍タウアンの銜ウチも少シく此制シ小似ニる也。如カクく思オモへる。又南都正倉院ミナトふる蒺藜銜アキリハ。是も唐鞍タウアン小用ヨウふる物モノ也。和名抄ニ辨色立成ニ云。蒺藜銜アキリ和名宇波良具都波ウハルキツハと見え。春日カスガ神殿テンの繪エふるハ。杏葉アヲハの繪エふる小鏡銜キョウケンを画カき。長門國ナガト一宮イツミヤふる唐鞍タウアンの銜ウチも此物モノ也。名義ナハ各其形ナ小就ス了ス也。なほ此余コノふる東大寺トウダイジハ幡ハタ小唐鞍タウアンふる用ヨウふる處トコロ。其状サマ常トド小異ニる物モノ也。其ハ何ナニと号ナヅケふる。又昔宇治ウヂ宝藏ホウゾウふる唐鑣タウケンを甲州カウシュ鷹トウの捉トり。山中ヤマナカの巢ネ小置オキる也。云事コトの物モノ小見ミえふる。此鑣タツナも唐鞍タウアン小用ヨウふる物モノ也。故ユヘ小唐鑣タウケンと呼ヨぶ也。或ハ形ナの異ヘふる也。西土セイトの制シを寫シせる物モノ也。思オモへる。然サハ唱ウタへし小也。

韁タツナ

和名抄ニ。兼名苑ニ云。轡タツナ訓久都波豆良クツハマメノリ。一名ヒトナ鑣タツナ。楊氏ヤウシ漢語抄ニ云。韁タツナ

鞚一名馬鞚和名同上とある。此又都波豆良ハヅラ即手綱テヅナの事也

此又都波豆良の波ハを和名抄の今本ハ和ハとハるキ。上の又都波ハ。又都和と書ルるキ。古本ハも共ハ。波の假字ハ用ヒるキ。其ハ。今ハ是ハもハるキ。なリ

然るハ。兼名ハ苑ハ。一名ハ鑑ト云フるキ。心得ハるキ。事也ハ。のキ。又

都波豆良ハ。いふハ。名義ハ。銜ハ。はらハるキ。緒ハ。ふるキ。故ハ。銜連ハの

義ハ。をハ。号ハ。あるキ。或ハ。銜蔓ハ。ふるキ。其ハ。此形ハの。草蔓ハ。似ハるキ。

を云フ。但草蔓ハ。いふハ。其蔓ハの。長ク。連ハるキ。のキ。名ハ。ふるキ。屋

節ハ。をハ。以テ。信ハ。せハ。しテ。もハ。其義ハ。違ハ。ふキ。まハ。じキ。也ハ。又伊勢氏ハ。銜

綱ハ。ふるキ。綱ハ。をハ。都良ハ。と云フ。ハ。綱貫ハ。をハ。都良奴岐ハ。と云フ。ハ。同ト。と云フ。を

まハ。此説ハ。然ル。るキ。べハ。くハ。思ハ。るキ。然ル。此ハ。轡ハ。をハ。順ハ。がハ。俗ハ。云フ。又都波ハ。と註

せハ。らハ。せハ。るキ。其頃ハ。ゆるキ。世俗ハ。ハ。轡ハ。をハ。銜ハの。度ハ。とハ。るキ。ゆハ。まハ。りキ。如

是ハ。ハ注ハ。をハ。しテ。也ハ。軍器考ハ。いハ。るキ。をハ。れハ。兼名苑ハの。まハ。ぎ

らハ。しテ。説ハ。をハ。其ハ。まハ。引ハ。きたハ。るキ。故ハ。思ハ。へハ。バ。此朝臣ハも轡ハと銜ハを。

一ハ。ハ思ハ。をハ。ふキ。されハ。いハ。ふキ。あハ。らハ。む。手綱ハ。と云フ。名義ハ。ハ明ハ。らハ。るキ。あハ。まハ。り

轡ハ。ハ漢籍ハ。御馬索ハ。也ハ。いハ。ハ鑑ハ。ハ馬勒ハ。と有ハ。一ハ。ハ云フ。べハ。まハ。

物ハ。あハ。らハ。む。然ル。るキ。和漢共ハ。如カ。此思ハ。をハ。惑ハ。へハ。るキ。由ハ。縁ハ。ハ。太平

御覽ハ。云フ。鄴中記ハ。石虎諱ハ。勒ハ。呼テ。馬勒ハ。曰ク。轡ハ。劉芳ハ。毛詩箋ハ。音義証

云フ。轡ハ。是ハ。御者ハ。所執ハ。也ハ。不得ハ。以テ。轡ハ。為テ。勒ハ。以テ。勒ハ。為テ。轡ハ。者ハ。北人ハ。避ル。石勒ハ。

名ハ。也ハ。又云フ。六轡ハ。在手ハ。以テ。所執ハ。為テ。轡ハ。審ハ。矣ハ。今俗儒ハ。咸ハ。以テ。轡ハ。為テ。勒ハ。而

曾無ハ。寤ハ。者ハ。のキ。見ハ。えハ。るキ。始ハ。ハ北人ハ。石勒ハの。名ハ。をハ。ばハ。るキ。のキ。り

了ハ。勒ハ。をハ。轡ハ。とハ。呼ハ。ぶキ。るキ。里ハ。混ハ。せハ。るキ。終ハ。ハ其誤ハ。りキ。故ハ。皇國ハ。まハ。り

も傳へあるよめありむ

かくて此飾は用ふる手細の制ハ諸鞍日記ハ綾也ト有る。綾ト云地を白くし。處々小間をおきた。何色にも染る。以ふ。俗小段の字を書き。段々小染る。度ふりといふも。義ハ通せ。伊勢氏ハこれき。飾抄ハ手細。蘓芳綾如常。四位青綾ト見え。人車記ハ蘓芳綾手細。公光卿記ハ蘓芳綾如恒ト見え。專ハ此鞍ハ蘓芳綾を用ふる。東大寺ハ幡の唐鞍あるハ。綾地ハ種々の色を交へし綾を用る。春日、神殿、繪ふ。蘇芳ト黄青。三色の綾ある。

鏡

和名抄ハ蔣勣切韻云鏡ハ和名安鞍、兩邊兼脚具也トあり。名の義ハ左右相踏の義也ト云説あり。是ハ足踏の意あらむ。是を阿トの云例ハ。足音足搔の類最多あり。此飾ハ用る物ハ。諸鞍日記ハ輪鏡也ト云。今其製を考ふる。正應元年十月廿一日の御記ハ。飭馬シカク輪鏡シカクト見え。薄泥ハシを塗る物ある。東大寺ハ幡ある。尾張國藝田社の唐鞍ある。金銅也ト云。春日、神殿の繪ハ見る。赤革ハ包むる様也。比余長門國一宮ある。唐鞍の圖ハ。物ハ出る。其形ハ。今賀茂祭の勅使の用らる。處尋ぬ。名義ハ。其形を以ふ。又壺鏡。舌長。半舌。ふとを。用ふる。壺ハ大和國法隆寺の寶物ハ古制の物あり。延喜左馬寮式造鞍の條ハ。大壺鏡ト見え。其制の大

る然云ふ事多し。名義ハ是ハ其形ハ就テ辨へらねりたり
又右の法隆寺の鐙ハ是ハ屬ある金銅の鉸具あり。凡上代
の鐙ハ今茲如ク頭ハ鉸具を付る事なく。只輪ハあり
ゆより。別ハ鉸具を作里了。力革の端ハ付る也。是ハ是ハ鐙
或掛る様ハ。諸鞍日記考註ハ委々註ハおれり。其書ハ
里了辨ふべし。鉸具ハ和名抄ハ楊氏漢語抄云。鉸具此間云
帶及鞍具以銅屬革也。有る。是を加古ト名付るよしハ。かぎ
の義也。谷川士清云里。按ハ是ハ始。字音ハ字轉せる訓あり
多し。鉸ハさみ合とて用をふも金具ふを。金ハ交を
字をふせるよし故ハ字書ハ。ささとし註ハ。金飾も
見えあり舌長ハ飾抄ハ其圖を画き。古唐鞍等多無舌。只輪
計也。而近代為踏能所為。效可然也。とある。名義ハ俗ハ舌先
云處の長く出る故ハ云。半舌ハ軍器考ハ。正倉院ある唐鞍
と云物の鐙ハ。法隆寺の物ハ如クあり。舌ある夏半舌と云
物の如ク云里。名義ハ。其舌の少く出る然。舌長ハ對テ半
舌より舌短など云。又永正の頃土佐、光信ハ画する。山門僧
傳神幸圖ハ云物を見し。是ハ唐鞍置る馬ハ。今の世常
ハ用ふる處の鐙を画。然其頃ハ唐鞍ハあり。鐙
を用ひしハ

逆鞞 鐙鞞

和名抄ハ。楊氏漢語抄云。逆鞞知加良。見えあり。諸鞍日記考
註云。古の力革ハ。今の世茲物ト異あり。巾着皮ト云物あり。力

革の端ハシに鉸具を付る也。さる力革といふハ總名ナ也。其中ハ
 美豆緒ミヅヅの名あり。力革ハ鐙を踏フ足タの力を受る意。美豆緒ハ穴
 緒也。穴を美豆ミヅと云ハ。針の穴を美豆と云ハ同ナ。力革ハ刺サス
 刺金也ササメ。或刺貫サス穴を。あけおス故ナ。穴緒ミヅと云也。と云里。
 名義ハ心ココロにハ此説の如クみス。逆韁サカと美豆緒を。云フつフ小
 見るミ。今イマの逆韁の上ウハ違タカ々々。古コハ一ツ物モノありシ
 其徴ハ。左馬寮式造鞍の條ハ。牛皮一條長三尺。廣三寸。有。次
 小牛皮一條長三尺。廣一寸。有。見ミ。和名抄ワナヒハ。美豆緒ハ逆韁
 の余ヨ有リ。揚氏漢語抄云。鐙韁ハ美豆ミヅ一云鐙斬ハ見ミ。是コト
 以テ美豆緒ハ力革の別コトある由ヨをシ。然シらば美豆緒ハ何
 材料ヲと云フ。是ハ逆韁ハ合アせテ用ヲをシ。物モノあるナ。大和

國東大寺若宮八幡社藏の古き移鞍ウツリハ屬ユ。力革の圖を見
 るニ。赤アカき革緒の下シ。同ナ革の少シ幅廣ハ。或ナ合アせテ鉸具
 小附ツあり。是ハゆる鐙韁ハ逆韁の二ツあるナ。然シらば力革
 と云名ハ鐙韁の力チカラと云る意ナ。さる者鐙韁の穴アナあり
 物ハ弱ヤるナ。是ハ思シ。是ハ助タカク。是ハ合ア用ヲするナ。むム
 思シへシ。

鞞シラガキ 當面オモガキ 當胸ムナガキ 下敷シタシキ

和名抄ハ。唐式云。諸蕃入朝スナ調度帳幕鞍韉鞞シラガキ。量事供給リヤウジツキョウキョウ。
 利加リカと名義ハ尻懸シラカケある。或ナ計ケと岐キハ通音トウオンある。或ナ尻
 加岐カキといフ。又後ハ尻加伊カケイと云ハ。岐キと伊イハ同音トウオンあり。通トウふフ
 故ナ。再轉ヒラキ唱ウタふるナ。當面ハ飾抄シラガキ。其圖を出シ。面懸立オモガキ

二尺廣一寸横加紐定三尺九寸方金物六と見え當胸ハ和名抄ハ後漢書云拔佩刀截馬當胸楊氏漢語抄云斑宵無奈加岐と註せり名義ハいつせも鞞ハ同じ

右の鞞當面當胸を世ハ三懸サカケと呼了其體一ふるが如し故諸の書どもハ此具の事を云るふるも鞞との有て別ハ當面當胸を註せざ然サを此書ハ和鞍已下ハ皆其例ハ習ハゆるれを其心して見る也

かく唐鞍ハ用ふる處の物ハ信範記ハ赤革鞞付金銅金物又物具裝束抄ハ革鞞入青瑠璃玉よる飾抄ハ鞞赤滑或朱漆付杏葉と有了正慶元年の記ハ赤滑子鞞と見え諸鞍日記ハ牛皮を赤滑子滑子と云り滑子ハ漆をぬり滑ら滑らのふる故

の名ふる也信範記ハ付金銅金物と有ハ即杏葉以結付る金物ハ下ハハ撰蝶の事也入青瑠璃玉と名和名抄ハ野玉按瑠璃俗云留利青色如玉物也と有云此物ハ白きもあれど世ハ紺瑠璃をのこ其色と云今用ふる處多クハ硝子也谷川士清云一説ハ此革鞞を楚鞞スヘと稱る也ハ其形少ク圓と有て長く直ふる状樹木の楚ハ似る世ハハ利と云り世俗淺深秘抄ハ楚鞞依官用之故唐鞍用之と見え又愚昧記ハ連着鞞付杏葉或唐鞍鞞或楚鞞也とある此愚昧記の註ハ就て考をハ楚ハ革鞞ハ限らざ凡て總トふき物を云歟さらば唐鞍鞞楚鞞と分てハハハハ也又延慶二年の記ハ付楚鞞之時有下敷と云事有又禪大御記ハ節下左大臣云々飾馬鞞下引赤地錦

付杏 兼 云 云 之 見 え 多 是 下 敷 の 支 多 る 處 し 然 然 然 敷 云 云 引 引 書 書 多 多 如 何 なる 小 似 たり 俗 小 敷 引 引 常 通 云 云 俗 語 の 儘 記 され 多 なる 處 し 記 録 多 事 の 多 なる 也 此 下 敷 今 世 小 下 絹 山 縁 起 多 保 元 談 の 繪 卷 多 小 女 の 乗 多 馬 の 鞞 下 小 白 絹 の 如 物 見 多 其 女 の 乗 騎 小 限 多 具 小 此 間 小 云 小 別 多 右 石 山 縁 起 の 繪 高 階 隆 兼 頃 人 の 画 多 多 古 物 多 多 不 少 参 考 の 為 其 圖 を 卷 末 小 見 多 多

陽龍記。節下、右大臣馬白栗毛鞞又正慶元年記。節下、左

大臣基嗣鞞在水引赤地とある。此水引ハいある物小のあらむ。世小水引と稱する物を幔の事小。鞞小著多なるあらむ。或人ハ下引を寫し誤る歟と云。ほせと二處小ま水引と書多む。あふハあらむ。是以て按小若ハ鞞の廻、み下引の垂多る。幔を引廻し多る。擬て云歟。幔を水引と号する義ハ台記小鷄船四艘云々。水引左右及艦引廻之紺唐綾処々画水文鰐画上際画干鳥画と以ふ。支の見え多む。ハ原ハ船小引と里出多る。名目よやと野宮卿ハ曰へき。

鞞シホテ

和名抄小。考聲切韻云。鞞和名之穿鞞鞞橋皮也。と見え。然をを異邦の鞞ハ。此方コナタの如く金具を交む。凡て革をて作る。

登し。名義ハ軍器考云。之保天と云事ハ。鞍の海と以ふ處より
出せむ。如是名付し如く。世に以ふふる誤せるもや。多し鞍
槁の四方より出し帶ふを如此云し也古き物より四方出
せむ記多しと云り已按ふ。是ハ鞍槁の四方より有る。胸當鞅を
繋ぎとむる物ふる故也。四方手の義をらむ歟。但物の名より音
訓を交へて云るハ。上代より聞えぬ事ふるを。此之保手も甚古
く千里の名あらむ也。四方手の意ハあらざ。其ハ胸當鞅
弦縛付る物ふる故也。縛手の義ふる弦。縛の利を畧き。波を保
ふ轉し唱ふるあらむ也。波を保ふ轉し云例ハ。葵を保布利波
良良を保呂々と云類最多の里。又按ふ。絹布をど弦絞ると云
るも免はる意ゆる。本ハ縛ると同言ふるを。是ハ絞手

の畧言ゆやとも思ゆる。又或人ハ絞處より。處を止とのと云
ハ立處伏處の類甚多く。又止を手より通し唱ふる例ハ。勅使を
止久之と云。且之とも云類也といへ。さて此鞍の飾より用ふ
る鞍の制。書籍とも見えざるもや。春日、神殿の繪ふるも
花形の如く見え。尾張、國勢田、社に唐鞍より用ふるハ。鏡鞍也
と云り。其ハ其形圓より鏡に似るを。号し多し

銀面 莒蒲形

按察使入道殿記 文保二年十月 小跡下大臣乘馬。銀面始置之。
馬頻有厭却氣仍於途中取之馬副。下薦持之とあり名義ハ白
銀より作るが故也。銀面とハ云あらむ也。野宮卿ハ曰く。然る
東大寺八幡ふる唐鞍の銀面ハ銀を張ふるハ。是其制の本也

了。信範記の鏡銀面と見えある。銀の鏡地あるを。春日神
殿の繪あるハ。地を錦小包とて金銅の文を打たる状サマ見
ゆ。菖蒲形ハ。右の銀面の屬ツケ馬の額小當アツる物モノ也。延喜式ハ
當額花形と有る此類あるを。天仁の或記ハ。殿下騎馬給間。
御額突當モラ菖蒲形人々稱ス危トふと云事ハ見えある。名義ハ其状
菖蒲葉小似るを以ふ。伊勢氏の書キ物ハ春日神ニ繪
ハ菖蒲形ハ。地を金銅ニ打ツ。色々綾錦を附あるを。らむ。
勢田の神馬小用ふる物ハ。真鍮ニ打ツ九枚有ると見し人の
語コト也。是真鍮ハあらざ。金銅ニ打ツふを。菖蒲ハ和名
抄ハ。養性要集云。菖蒲一名是蒲和名阿夜と見ゆ
女父佐

角袋 髮袋

物具装束抄唐鞍の具ハ角袋と見え。諸鞍日記同鞍の條ハ
角袋とて錦小包とハ。本ハ金カネ小コ先細あるを。頭の上ハ附る
也と註せり。錦小包とハ。表を錦小包メめる也。心ハ革ある小
や伊勢氏云ナリ名義ハ車服制度手記ハ。此名目難心得候。
馬ハ角あるを。見ミえあるを。是ハ其状の角ハ似
ある故也。角を納る義ハ。然シら何の料ネと云ハ。
是ハ其髪を納る物也。所謂イハ髮袋の一名あるを。其の思ハ
故ハ御禊行幸の記録シハ。是ハ鞍具を註シされある也。髮
袋を擧る角袋を云ハ。又物具装束抄諸鞍日記等ハ。既ハ云
るが如く。角袋を註して髮袋ハ見え。是一物二名也。角
袋ハ其軀を以て。髮袋ハ是ハ用を云ハ。名と知らる也。然

○飾馬考上

○二十

も後小至^りハ。髪を納る夏あく只頭の飾と^りなるが故也。面懸の上小木など^り此袋を被^るる物を付^けおく^るなり。東大寺八幡ふる唐鞍の面懸^ハ附ふる物ハ木小箔を押ふる

頸總

諸書唐鞍の具小見えあり。名義ハ頸小纏^り下る故也云。其制ハ飾抄^ハ透物^ニ中有^リ大鈴^下瓔珞^とある。是ハ總^ハの鉢を金銅^ハど^り作^り唐草の類を彫^り透^しふる^るなり。東大寺八幡ふるも^ハ製^の物也。下瓔珞^と多^ク總^の廻^り種々の玉を緒小貫^下る^るなり。諸鞍日記^ハも頸總^となり。頤^ノ下^ニ付^ルるものあり。色々玉を貫^下る^る。長^ニ尺余也^と云^リ。如^ク是^ノ大^キなる物^ハ馬^ノの厭^ハより。手振^ハ持^ルる由^ハ宇槐^記康^治元

小見え。公光脚記^{仁治三}御^禊条^ハ云^フ。雲珠^{手振}持^レ之^ハ頸總^同。あり。次^ハ是^ハ持^様を記^スる^る。頸總^{不懸}木^ニ以^テ右^手取^リ頂^ハ雲珠^以左^手持^ル見^えあり。雲珠^ハ馬^ノの厭^ハを持^ルる^るなり。

杏葉

和名抄^ハ辨色立成^云。杏葉^{和名伊俣良}とあり。是^ハふる時^ハ伊俣良^ハ以^テ正語^ハなり。古^ハより專^字音^ハ呼^ハ馴^ルなり。伊俣良^ハ云^フ名^ハ。此書^ノの外^ハ見えざる也。か^ク名義^を按^ル。伊^ハ發語^の言^ハ。比^良ハ葉^ハ云^フ。歎^ハ葉^を比^良と云^フ。夏^ハ日本^{書紀}及^テ延喜式^ハ小葉盤^と有^リ。和名抄^ハも葉^手ふ^ル見え^るなり。又^ハ谷川^{士清}ハ和訓^栞ハ杏葉^ハ銀杏^ノ葉^ハなり。有^ル時^ハハ。銀杏^ノ畧語^ハなり。あ^らむ^ハ歎^ハ伊勢^氏ハ和名抄^ハ杏子^{和名}

加良と有る。俗に阿牟須と云物ふる。此木の新葉を生る時。毛々其葉の重なり。譬に蓑荷の如くぬる。其状に習ひて是を作。小に里杏葉といふ。但飾抄に圖に見えたる。一枚の老葉。里と云ま。いふに此鞍の飾に用ふる處大概ハさ形。物ふ。然ま。世に杏葉と稱る物。馬具にみあら。瓔珞などの端に著る金具の類。或ハ幕の紋。まハ屋造の搏風に繪様形をして。其上に打物を杏葉と呼。いば。其體一様あらぬ。中。銀杏の葉乃形しる。多く見えぬ。杏子の如きハ何ら。但軍器考に見えたる楠正成の胸丸に付る杏葉ハ。飾抄の圖に見る處に大畧同様なる物也。今の具足に用るは。是ハ何の葉にても大方ハ。さ状の物。ふま。是を杏樹の老葉と云。定まら。云ま。みあら。又此鞍の飾に用ふる杏葉の中。伊勢神宮の白馬形ふるハ。其形並にハ違ひ。聊に蓑虫とみ似る。ぬハあら。又春日、神殿の繪に見えたるハ。少く銀杏の形に似る。是以に按。小凡に此飾に用ふる杏葉も。始瓔珞と云金具と同じ。銀杏葉に有る。後其制の轉る。み。あら。此物ハ車服制度手記に。只今大総を用候や。當曾鞆に著候。革。作候に註し給へ。然ま。多くハ金に作り。革。京御靈の社にみ有る。ぬ。故に諸鞍日記に。杏葉ハ金に打ち云々。云。是を著る。ハ公光卿記に。杏葉。鞆左右各五枚。胸掛五枚。面。掛左右各五枚。合二十五枚。と有る。又貞應元年十月廿三日。

禪大御記。飾馬唐鞍レカク云々。杏葉鞞十。宵掛五。面と見え。物具装

束抄ハ。杏葉ムナカイセシリが掛西方各七と註シさるる。其數定

る。ハあらむ。又正慶元年十月廿八日、記。長杏葉と云名の

見え。是ハ並ナつ小勝ナせり。其葉の長きハ以ハふと聞ゆる也。

又鏡杏葉と号ナる物有リ其ハ信範記康治元御襖の條ハ見え又

同記壽永元御襖の條ハ鏡杏葉有青地唐ふと見え。鏡と

云名の義ハ先ハ云フるが如し。在青地唐錦敷物とハ裏ハ錦を

敷ル也。文保二年の記ハも。杏葉地敷錦と云事見え。里今

紀伊園熊野飛鳥社ハ唐鞍ハ用ふる。杏葉の表を金銅ハして

裏ハ赤地錦を張ふるハ。是右の記録ハも云ハ處の製也ミス。然る

が諸鞍日記考註ハ。錦を張ふる方を表の如クにハしハ。春

日神殿の繪ハ杏葉ハ彩色を加ハたるふと依リ。然ハおそむ

撰蝶

物具装束抄唐鞍の具ハ。撰蝶胸掛十。鞞十と見え。長秋記ハ

蝶形鞞左右各五。宵當七。面當十也とある。此蝶形ハ一物ハ

是ハ杏葉を結付る處の金物を。蝶形ハせり。然ハ云ふるハ。平

胡錄ハも其餘の器ハも。蝶の形ハ作スる金具ある物ハおそし

さる是を撰蝶と名付る義ハを按ルる。撰ハ字書ハ引持也ハ。

曲折也ハ。有小據る時ハ。杏葉と此金物と相互ハ引持故の

名ハもあらむ歟。又蝶の羽と羽を相持して。或ハ曲折ハる形

もハ里ある名ハもふやも撰ハ猶結ハと見え又捻也安也ハ

望み以も不ふ註し見みえ多おほれを。是こハ杏葉を搥スミく、まる安やすまる意い歟や
とも思おもへりしが。まる按オモハ此こ蝶と以も不ふ名な也や。やがとも彼の羽のと
羽と撰せんまるるとも里の義ぎ也や。然しかハ名な付つふ物ものあるべしれを撰せん
蝶ハ蛺蝶胡蝶ふと以も不ふともおもじく。只ただ蝶の事ことと見みるあるべし
まる也や。蛺蝶ハ和名抄ハ蝶を註して蛺蝶一名野蛾と見みえ。胡蝶
ハ搜神記ハ。麥之為ハ胡蝶也と云ふ也や。

八子ハネ

諸書唐鞍の具ハ見みえ多おほき。名な義ぎハ未まくも按オモ得とくも以も不ふ也や。
試しふ云ふ也や。此こ具ハ馬の左さ右みぎ小こ出いでる。其その状さま鳥の西さい翼よく小こ似に多おほれバ
いふ歟や。波ハ和名抄ハ爾雅集註曰。翻ハ和名一云ふ羽根也と有あ
る。翼ハ異ハあるが如ごとくもふれども古今集ハ白雲ハ存ぞりら
る。のとしし飛鷹の。とも又また土佐日記ハ。まる名な残ぞ聞きとも
後ご。とも存ぞりらを飛との如ごとくも。都みやこへも我われふと詠よむ。是こらも羽根ハ
皆みな翼の事ことなり。今いま翻と翼を一つ云ふハ常じょうの事ことなり。さる残ぞ或ある
人ひとハ今いまの唐鞍ハ見みる處ところ八筋ある故ゆ也や。八子ハ云ふらむとも云ふ。
注し。飾抄ハ西方六筋已上十二と見みえ。春日ハ神かみ殿の繪え小こ
ハ。十枚ありきもれを。今いまの數かずとも云ふ也や。まるあらむ故ゆ也や。僕オレハ古ふる
くも里ハ波ハ呼よび來まる小こ撰せんせり又また伊勢氏ハ是こをも栴花ハ葉ハ
の貫くわん鞘せうとも一つ物ものの如ごとくも云ふ也や。其そのハ異ちがふ物ものなり。其その由よし
ハ次つぎの和鞍ハ條じょう云ふ也や。とも了り物具装束抄ハ餉付じょう十と以も
ふ事ことの見みえ多おほき。是こらも此こ八子ハ一つ物ものハ有あり。以も不ふともふ
せバ。世よいふ餉付じょうふらむも。以も不ふとも十と云ふ數かずあらむも。ゆゑ

小さを思ひ定め了云也

世小餉付と稱る物ハ。鞍を鞍槁カウ小取ト着ツケる。其緒の余ヒを。後

槁の左右小垂シ置ケ了古旅行リョウと知ハ。餉を結付ムスふとせり

出デる名ナも了。和名抄ワナヒハ唐韻テウオン云。鞵カウ鞍アサ鞞カウ也。揚氏漢語抄云

とあり

又飾抄八子の圖小註シ了。或記モツケ。と見えミるハ。物付モノツケの

畧言リョウゴンも了。今の俗ヨコも。鞍の後アサノノチ左を捕付ト呼ヒ右を物付モノツケと云里。

さきバ。八子ハ始モト餉付カウツケと里出トる物モノも了故ユハ。物具抄モノツグハ。其

始モト小つツきて。餉付カウツケと註シ。飾抄カウツケの或記オシキハ。其別名マナナを云る也

雲珠ウヅ

和名抄ワナヒ小辨色立成云。雲珠ウヅ。宇須ウス。今按イマ雲珠ウヅ雲母ウモ之ノ。宇ウあり。此物コノモノハ

伊勢御神寶イセノミカミタマ白馬形シラウマノカタハ左右鞍サダマ上ノ交結マシる處トコロハ居置イマ也ナリと云ハ。

諸鞍日記シヨアサノニヒも。雲珠ウヅハ鞞カウの上ノ付ツる也。姫寶珠ヒメタマの様サマも了物

小坐コザを敷シ了付ツる也ナリと註シ。諸社シヨシャの神寶ミカミタマ及マシ古コき繪エもモ見ミえ

る也。大概オホカタクハさる物モノも了。只飾抄シヨカウツケ見ミる處トコロ他タハ異イなるナリ如カく

ふせと此抄コノカウツケの圖ヅもハ凡オホ了画カキ様サマの麋アラきも了里。定サダ小コ辨ハへ

のノかる也。のノくクる名義ナニを考カるルハ。先マ此雲珠ウヅと稱ナる物モノハ和名

抄カウツケ註シせらシせシらシ如カく。雲母ウモの一名ナニも了。本草ホネソウも雲母ウモ色青

白シロ多オホ赤アカ物モノ名ナ雲珠ウヅと見えミるナリ也。是コノをシて馬ウマの飾カウツケと為ナるハ。以

のノも詳コトふらぬ事コト也。是コノ以テ按オシハ。雲珠ウヅハ只其字シを借カるル物

も了。如此カく宇須ウスと云語コトハ。宇豆ウヅと同言ドウゴンも了何ナニも了一

際サカイ高タカき事コトを云イふハおおししき也

宇須と宇豆をを同言也と云由ハ。宗武卿も既く曰へり須と
豆を通ぞ云例ハ。塚を須伎といひ。又次成る須岐と云類也
然るハ髻華を宇須と云ふ。高く頭みさき故也。よる太秦を宇
豆麻佐と云ふ其由縁ハ。日本紀雄略天皇の紀ハ。十五年秦民
云々。由是秦造酒甚以為憂仕於天皇。天皇愛寵之。詔聚秦民賜
秦酒。公仍領率百八十種。奉獻庸調。絹繡充積。朝廷因賜姓曰
禹豆麻佐。佐皆盈積之貌也。如是見えむ世ハ。宇豆麻佐ハ。宇豆
盛勝るふ。宇豆ハ則高き貌を云是。今の世ハ物を多く積め
る。ある成。宇豆高しと云ふ合へり。本居翁が古事記傳ハ云里
此宇豆高しといふ事ハ。文選ハ。穹隆を。志の訓。字書ハ
穹、高也と註しある。是宇豆ハ高き度を云證也

又萬葉集十五の卷。田邊秋庭が歌ハ。巨禮也。已能。名尔。於布奈
流門能。宇頭之保尔と詠る。此宇頭之保ハ。高き潮を云里と聞
ゆる也。然世ハ此雲珠といふ具ハ。鞆の上ハ高き秀る玉の
飾ふるを云。宇豆とハ名付あるふハ。あらむ歟。高き宇豆
といふ事ノ意ハ。よく按得むといへとも。試ふ云。上積ノ義
ハ。物を埋と云ふ。則此上積ノ畧言ハ。登し。又一説ハ。稜
威と云事ヲ。宇豆と一意ハ。むといふ里。さる多神代記ハ。稜
威此云伊都と見え。神武紀ハ。下ハ。嚴を訓里。其ハ。氣出ノ意
ハ。登しと云。説ハ。擡と云。稜威ハ。嚴ハ。神威ノ嚴然ハ。登
云。五十槻。湯津真坂樹。ふとも。皆一際勝を。目ふ。一
を云。稱と覺し。これハ。此宇豆。了。ふ言ハ。雲珠ハ。髻華ハ。

あま勝せり目立しく。華麗ふる哉云々と思へる。あまへ伊
都久之無と云々を。宇都久之牟と云ふ。其伊都久之無と
ふまハ。靈異記小儼然の字を書るふるも知る。須と都と通
例ハ勝美既小云ふ如し。されが雲珠ハ馬の飾の中なる。勝
を宇圖と訓了。是ハ愛もき意と聞ゆせを雲珠も其意歟。越前
國敦賀郡。五幡神社と有る。珍幡の意ふる。字書小珍寶也
貴也瑞也奇也とある。珍も通じて考ふべしと云り夫木集小
唐鞍や。駒もあざぬ。ぬるさとの。庭もせふゆ。うむ櫻哉
鞍馬乃山の字をささくらと云々。唐鞍小此雲珠と云ふ物の
あるより云出あるふる。此具を今の瘦隠也と云ハ非説也

腹帶 表腹帶

和名抄小。唐韻云纒和名波馬腹帶也と見え。延喜式ハ小腹
帯とあり。其ハ表腹帶を。大帯と云ふ對へると云歟又物具
装束抄小鞞カサ又信範記小白布鞞カサと見えふる。此鞞も腹
帯の事ふる。志の号る義ハ。鞍槁の由木小結付るが故小由木
搦カサ意ふる。鞞の字を書るハ借字也。さす由木ハ居木の轉語
ふる居木とハ人の乗居る處の木ふる。ハ以ふ
長秋記唐鞍の具小。鞞カサ加良美と云事の見えふるハ。鞞を鞞
小誤せる也。右の信範記の鞞搦を。一本小ハ鞞搦と書里
表腹帶ハ。和名抄小周禮注云鞞和名宇波馬大帶也とあり。名
義ハ腹帶の上小用ふる物ふる故小云。其制ハ信範記小赤地

錦表腹帯と見え。諸鞍日記に表腹帯と云。革を一寸許り切り、
錦に包ちり。先小鐙の鉸具にやうに打り付る也と云里。
延喜式に多調布七尺を表腹帯料と註せらるるを。始ハ布
を用ひしふるを。春日、神殿の繪に表腹帯も。白布の如く小
見え多里又公光卿記に表腹帯一筋と云。更あり。按小相ハ和
名抄に唐韻云。相和名阿古 女人近身衣也と有。阿古女以
ふ名義ハ始童女の服ある故。吾子女の意也といひ。又赤染
の約言ふ里と云里。其ハ何れも有る。此間ハ只絹の
借字に用ひらるるに多し。相の義ハあつるべし。
さる此物ハ表腹帯の何處に付るに考ふるを

鈴スミ 腹鈴ハラスミ

和名抄に陸詞切韻云。鈴似鐘小。揚氏漢語抄云。鈴子須あり。
是ハ其音の涼しけきを云ふらむと契冲云里。以あふも神名
秘書に鈴音字也と見え多し。此具多鞞ハ子尾袋ふと著る
物に其制を金銅。或ハ真鍮をて作里。形ハ尋常にあり。形
らる。多腹鈴と唱ふる物あり。其ハ保安の朝記に見え。信範
記にハ腹下の大鈴とあり。此物ハ伊勢氏に説に春日、神殿
の繪の胸掛に前々長く垂る鈴を画があり。是れもゆる腹
鈴に其ハ前々付るを。垂る腹下小至るを。腹鈴ハ名付
るにやといふれきさる事あらむと考ふるを。長秋記にハ
无腹鈴近來と見え多し。

尾鞞ラブシロ

和名抄小考聲切韻云。紛俗云尾袋所以鞞馬尾也。註云。延喜式左馬寮式正月七日青馬茶云。尾袋當額花形已上二種云々尾袋小鈴を着る支ハ。信範記小尾袋付鈴有了。飾抄小鈴の付る尾袋の圖見え多里。名義ハ尾を鞞故の稱ある事云。さらふ里。あくる諸鞍日記云。尾袋と多尾を唐尾取了尾筒を入る付る也。此尾袋の左右小蝶の様ある物を着る也。云里尾袋さる物を着る事ハ此記の外小見えざる小や。伊勢神宮の白馬形ハ緒小玉を貫了。末小银杏の葉形やうある金具付る物を。尾株の本と里尾袋の上小下多里。また春日、神殿の繪小見る處ハ。尾株のあり小雲形の如きを能く里。かくる此具を用ふる時。尾を唐尾結事ハ。御禊行幸の記録等小見え是を唐尾と名付る義ハ唐の童髪を総角結ふ如くする故也。云説あをど。是ハ緘尾の畧語ある也。さるハ蔓草或唐草といふ。唐ハ例の借字了緘草の義ふ也。

差繩引差繩

飾抄小差繩云々御禊白差繩也。註云。物具装束抄小白差繩唐鞍云々と見え。又信範記康治又壽唐鞍の具を註了た常用之ヲと見え。又信範記永御禊条唐鞍の具を註了たる小白差繩と有了陽龍記寛元御小ハ郎下右大臣馬白栗云々。差繩藤芳綾と註了たを御禊時ハ專ら白差繩唐綾有同未濃と註了たを御禊時ハ專ら白差繩了稀ハ然有ぬを用ひらる也。名義ハ頭小さる物されバ以ふ。此具飾馬用ふる處二種あり了。其一を差々

繩と云ふ。今一ツを引差繩と稱する事。諸書小見えし事。かゝる伊勢氏云。差々繩ハ氣の過る馬の。走里出んとする。後へ引止るやうに引也。是を尻綱と云。引差繩ハ先小立了牽也。春日、神殿ふる飾馬の繪を見る。右の差繩を近衛番長是を執了。後へ引如く歩む。左ハ馬部下郎が取了。先へ歩むさよふ画け里。是差々繩と引差繩也と云。其ま。差々繩と云ふ名の義考ふ。引差繩ハ先小立了。牽故の稱ふる。又云。さら也。又飾抄小公卿師差繩。四位已下片差繩と見えある。是ハ差々繩と引差繩を。左右小二筋宛さる。師差繩と云。左小差々繩をさし。右小引差繩を用ふる。片差繩と云。春日、神殿の繪形ハ則片差繩也。

藥袋

康治元年十月廿六日、台記小。藥袋在唐鞍具と見え。色葉字類抄小。唐鞍具也と見え。此物ハ馬の藥袋入る具なるや。其制ハ信範記小。藥袋黒漆螺鈿有丸緒并蕪芳未濃、総とある。是ハ革袋を黒漆塗了。螺鈿を加へるやあらむ。その其形ハ物小見え。刑部大輔光長が画ける。年中行事唐鞍の画。馬部が袋の如き物を。木の末小結付了持るある。是若ハ藥袋あらむ。然らバ此圖小就了其状辨へらねる。

鞭

和名抄小。野王按鞭和名無知馬筴也亦作シカク。所以策馬驅遲也。見え。軍器考鞍具條小云。和名抄小鞭ハ無知。俗云無

遅く見えあるニツの無字。一ツハ寫し誤せるあるを云ふ。源三位
頼政が藤鞭。桐火桶。頼政ふと云ふ事を詠る歌。宇治川の瀬
瀬の洲々云々と見えあるを。此物を無遅と云ハ俗の誤也。
然らバ和名抄の無字。一ツハ不ハ作らましく云里。是ハさる
事あるを云ふ。あつた名義を按ふ。鞭ハ馬打物なまハ。字知
云。まを。不ハ無ハ字の通音ある故。轉じて不知とも無遅
とも云。又後ハ夫知とも云ハ打つふを強く云ふせる也。
其ハ此具ハ限らざ。凡そ物をお事を今の俗ハ然も云里
此具を往昔不知と云里。夏ハ物ハ見えざるを疑ふ人の
有ぬを云ふ。凡そ皇國の物ハ名ハ上を濁りて云る。夏上
代ハハ聞えぬ。斑を中昔より云る。斑ハハ夫知と

訓ある哉日本紀神代卷天斑駒の訓ハ不知とある此例ハ據る也
然ハ云里と知らる也

然る此鞍ハ用る物ハ。信範記唐鞍具ハ。蔣繪鞭卷檀紙と有て。
此余ハハ不見えある里。蔣繪ハ描金を云。皇明文則ハ宣徳間
嘗遣人至倭國傳泥金畫漆之法而歸と見え七修類稿ハ泥
金絲漆出干日本と記しある也。蔣繪ハ皇國を本とす。蔣ハ俗
ハハ云義あるを云ふ。鞭ハ檀紙を卷夏。壯年の人を紅
梅檀紙を用ひ老人ハ白きを用ふる由裝束抄ハ見え又是を
卷やうハ高倉家抄ハ。鞭蔣繪本未卷紙有五位已上用之とあり。
檀紙ハ檀の皮を爲る故云。檀ハ和名抄ハ萬由美と註
せ孝已上唐鞍の具也是を飾る様ハ。圖に就て辨る

○飾馬考上

唐鞍



○飾馬考上

○三十一

倭鞍

諸抄及大嘗會の記録と云ふ見えしに。名義ハ俗ハ唐鞍を異邦の制とぞ思ひふしあるを。彼ハ對してハ号けし如き也。然れども此倭鞍といふ名。以て古き物ハ見えざる也。類聚名義抄ハ唐鞍移鞍結鞍。次第で載るを。和鞍の名を以てず。又和名抄云。俗有唐鞍移鞍結鞍等名。註して倭鞍の事あり

右の和名抄天文本ハ移鞍を倭鞍とせり。其ハ字躰も似たる上。上ハ唐鞍と有り誤り下を倭鞍と寫しむべからざる。或ハさのしらふ。改めざるも有る。唐鞍倭鞍と有るは。唐鞍移鞍と誤るを。まづあらざるやゆゑ也

ハ移鞍とあるかゝるはしとす

然る此鞍の飾ハ御禊行幸の時。よまさらぬを。唐鞍具を用ひらせある事あり。其例ハ時範記寛治御禊の条。下左大臣唐鞍。少納言公衡倭鞍有銀面。外記二人三善雅仲。惟宗。仲信。尾袋杏葉等。と有る。此余ふ。ふらあま見え然る飾抄和鞍の條ハ。保安五年九月二十一日。初齋宮御禊。前駟中將。宗能朝臣。馬鹿。黒地螺鈿橋。大滑云々。連着鞞付杏葉。と見えある。是御禊行幸の時ふらども唐鞍の具を用ひらせある例證あり

初齋宮御禊ハ。齋宮式ハ。凡齋内親王定畢。即ト宮城内便所。為初齋院。移禊而入。至干明年七月。齋於此院。更ト城外淨野。造野宮。畢。八月上旬。卜定吉日。臨河。移禊。即入野宮。自遷入。日

至于明年八月齋於此宮。九月下旬卜定吉日臨河祓禊。參入於伊勢齋宮とある。

和鞍具

鞍槁

桃花葉ハナ。鞍サ。倭ヤマト水精地ミヅホウ。中納言ナクナノミ銀地ギン。上鏡地カミキヨウ。赤銅アカドウ。黑地クロ。中將ナカノボウ黃地ワウ。

三位ミツタラシ龜甲地カメカウ。將シヤウ。蒔繪マキエ鉢鞍ハチサ。野望ノボウ。とある。水精地ハ伊勢氏云先年

酒井雅樂頭忠恭。寛治年中制作の水精地ハ鞍槁を求出了。伊勢因幡貞城ハ摸ウツさせしを見し。摠躰ソウタマ。弦金の梨子地コノコと。

牡丹の花形を散して水精を入る。と其水精の下小色々の繪具をさしたる。上の透了五彩の玉の如く。美麗なる

名也といふ。然れども凡そ何地と云ハ。摠躰の地をいふ事也。此槁水精を用ひる。凡そ之の梨子地とらん

残い。づゝ水精地とハ云。然るをある物ハ此圖を出し

ある。水精地と有ハ不審イカガシき。或人ハ極品の雲母地クモを云。云々。云々。

い。の。物。を。い。ふ。或人ハ極品の雲母地を云。云々。云々。

い。の。物。を。い。ふ。或人ハ極品の雲母地を云。云々。云々。

い。の。物。を。い。ふ。或人ハ極品の雲母地を云。云々。云々。

い。の。物。を。い。ふ。或人ハ極品の雲母地を云。云々。云々。

い。の。物。を。い。ふ。或人ハ極品の雲母地を云。云々。云々。

い。の。物。を。い。ふ。或人ハ極品の雲母地を云。云々。云々。

い。の。物。を。い。ふ。或人ハ極品の雲母地を云。云々。云々。

い。の。物。を。い。ふ。或人ハ極品の雲母地を云。云々。云々。

い。の。物。を。い。ふ。或人ハ極品の雲母地を云。云々。云々。

以ふ。但其銀ハ白銅ふる銅金。是ハ長秋記ハ橋金地銅金ト有。
小對カカへ了然ヤと思へる也。愚昧記ハ銀地橋瑠璃置葵形ヲト有。
是ハ袍の紋ふと見る。小葵の類を押たるふカ。鏡地ハ
諸書ハ鏡鞍ト見えた事。名義ハ既ハ云るが如し。是ハ或
人多金ホネをた小張カはせバ。磨カぬを鏡ト以ふ如くいひけれ
ト然らず金地銀地ハ鏡ふるべき哉。此間ハ銀地ト鏡地を。如
是分ち了註せる事。是磨くと。磨ぬと小カ。其名の差別
ある故也よく思ふべし。黒地ハ装束抄和鞍の條ハ。壽永二年
二月二十一日。朝覲行幸ハ。京極攝政干時中将ハ騎馬。黒地
鞍シカク云々。又建保二年三月二十六日。京極黃門記ハ。春日行幸少
將為家黒地鞍を用カらると見え。又飾抄ハ和鞍行幸可用縁

螺鈿ヲ云々。又三條装束抄ハ。治承五年六月十日。月輪殿下記云。
行幸ハ大将縁螺鈿の鞍を用ふトある。是ハ黒地橋の縁ハ螺
鈿を摺カふる物ある事以ふカ。黄地ハ玉海ハ治承三年
正月二日。朝覲行幸中将良通供奉馬鬚白院。鞍黄地ト有。同書
安元三年。御塔供養行幸の條ハ。御鞍橋黄地ト有。此余於
物ハ本黄地の名見え多事。よく名義を按るハ。是ハ金
地ト一物ハ多あらぬカ。是ハ長秋記ハ。橋金
地銅金トあるハ。是ハ所謂滅金スの類ハ。俗ハ。是ハたぐひの物を黄ト以
金銅ハ。所謂滅金スの類ハ。俗ハ。是ハたぐひの物を黄ト以
へせむ也。是ハ按ハ黄ハ木の假借ハ。木地カ。如シ思
ふ事カ。故ハ。太刀ハ木地螺鈿ト以ふ物あり。其ハ何の木

小て木のおふる小螺鈿を入る物ふき也。亀甲地ハ
三條装束抄小。大治五年朝覲行幸の日。少將頼長亀甲地の鞍
を用ふとあり。伊勢氏云亀甲地ハ玳瑁を以て飾る物ふる
也。埃囊抄幕の紋は條小。玳瑁の字を出して加女乃加字と
訓を付す。註小亀甲とあり。是小する時ハ。亀甲小玳瑁の字を
用ふる如く。玳瑁をよめる亀甲と書しふらむと云き。さる事
小や考ふべし。玳瑁ハ和名抄小曹憲曰瑇瑁云々。如亀出大海。
大者如蘧蔕背上有鱗。鱗大如扇。有文章。將作器則煮其鱗。如柔
皮。任意用之とあり。蔣繪鞍ハ飾抄及諸抄小見ゆ。蔣繪の事
ハ既小云々。鉢鞍ハ又伊勢氏の説小。凡古代の鞍槁ハ。前後の
輪の圓あらざるも有し也。先年酒井雅樂頭忠恭。寛治年中制

作の鞍槁を摸作せる物也とて。見せらるし。前後の輪は頭
三角小。將基の駒の形小似たり。又外小古き鞍槁を圖せる
我見し小。是ハ前後の輪大ら方小し。小圓我兼し。昔ハ
如是さまぐふるも有し。輪の圓きハ鉢小似る。や
あて鉢鞍と名呼ふるあらんと云き。此余沃掛地ホカを用ふる
事も物小見え。沃掛ハ職人歌合。蔣繪師の所小可け地
と見え。俗ハいつの事なごも。是ハ金泥を類を。まき
かくる。沃掛地の太刀と云小。粉と金具を交へる。まき
ある也。野宮卿ハ曰へき

切付

物具装束抄和鞍の具小。切付四位虎豹と有。又下小切付五位の定

を註せらるる。小豹公卿及四竹豹小豹ヨリモ藤物也。虎
位五とあり。切付と以ふ名義ハ既ハ云るが如し。さる右の毛皮乃
名等ドモを按ふ。小豹ハ本草集解ハ土豹と有る。圓文ウききそのな
まト定基卿曰ハ竹豹ハ只豹の事ふる。虎豹の皮を竹皮
ふと云る。就テ竹豹ト唱ふるならむと思へる。三條
装束抄ハ保安五年二月。上皇雪見御幸ハ御騎馬云々豹切付
竹豹ニとあり。此註ハ據時ハ竹豹ハ一物ハあらむ。或人
ハ豹ハ圓文ある。只黒點のハ有る。其圓文の方ハ竹豹
と云フ其ハ文の形ハ竹の切り口ハ似るを也と云る。然る事ハや
未トく按得オモヒざる。虎豹の皮を竹皮ト稱ナクる事ハ。其文の形
箏皮の黒点ハ似るをいふ。故ハ淵鑑類函ハ韓愈ハ箏皮詠

た詩ハ見ル角牛羊没看皮ハ虎豹存ト作ル是等の切付を
用ハらるる。事ハ物ハ見ル多ク。装束抄ハ治承元年蓮花王
院堂供養ハ行幸ハ後京極攝政云々切付ハ小豹。又山槐記ハ治
承三年石清水臨時祭使。右少将隆家朝臣馬鴨毛云々ふと見
え竹豹ハ同抄ハ嘉禎四年。春日行幸ハ左大将竹豹山槐記ハ
永曆二年四月酉使。右少将通能朝臣引馬竹豹切付ハ有ル。虎ハ
和名抄ハ說文云虎和名止良山獸之君也ト有ル。さる此切付を用
ひらるる例ハ。愚昧記ハ仁安三年四月賀茂祭皇后宮使ハ
左衛門權佐經房引馬黒地鞍虎皮切付ト見ルあり。
鞍褥
諸書和鞍の具ハ云處赤地錦ト註ス。今賀茂祭の勅使の引

馬小用をらふも全此物なり云々

鞍杷

挑花葉和鞍の具也。鞍覆薄物有繡見えある也。いとゆる透鞍覆ふ。此余の書ども小見る所も全此制の物也。但たよ多まを綾錦あるひハ豹の皮など我用ひらせし事也。物小見えあるよし或人ハ云々

障泥アフリ大滑

和名抄小唐韻云。鞞和名阿布利。鞍飾也。西京雜記云玫瑰鞍。以緑地錦為蔽泥今按即障泥也。後稍以熊羆皮為之。あり。名義ハ阿アフリ留。以ふ用語を。躰ハいひふ也。契冲云。俗小あふり云々。同言なる。さ。此飾小用ふる物也。物具裝束抄小尺障泥

切付ノ時ノ用レ之ヲ。滑ノ時不用レ之。とあり。是大嘗會御襖の時なり。大滑は

用ひらるる事のある故也。如是ハ註せらるる也。名義ハ

まふとく按得多と云々。試小云バ。此具ハ常の障泥小違ひ

了長く裾廣ふるが。少く笏の形小似るをいふ歟。笏ハ和名

抄小四聲字苑云。笏音忽。俗手板長一尺六寸。闊三寸厚五分也

と有る。俗小是を尺と稱する義ハ。一説小笏の音骨と同じき

を忌了尺といふ。其ハ笏をそ了物の長短を量るが故小。尺の

音を借ふる也と云々。さる事ふる。葉黄記小寛元四年五

月。上皇八幡御泰籠の時。花山院三位中将黒鞍尺障泥。また吉

槐記乾元二年正月八幡御幸の條小。黒御馬白御馬。鞍云々尺

障泥と見え。諸鞍日記小是の制作を註しふる小ハ。馬の皮は

黒く塗る。根本ハ琵琶の撥盤塗如く。搥の木汁を塗る也
云々。琵琶の撥盤ハ是弦弾くま。撥の當る所ハ横さまふ
一文字の板を渡せる所ある。其を撥盤とも撥面とも云。其板
を搥の木汁煎汁を。黄色に深る也。伊勢氏云。搥木
和名抄染色具部。文選註云。搥和名波。今云黄搥木也。有物
なる。以賀茂祭の勅使引馬に用ひらる。處ハ熊の皮ハ
金伏輪を掛る物也。云々。此熊毛の障泥ハ。延喜式ハ
五位已上着る事を聽ユルさる。見え。伏輪ハ装束抄ハ花旗人懸
之。或ハ黄絲を以て是を組押と註し。治承三年二月石清水臨
時祭。左少将隆房朝臣。障泥黄組伏輪を用ふ。有。金伏
輪ハ浅官の人用ふ。見え。見え。

銜

桃花葉小嚮鏡と見え。さる三條装束抄ハ嚮金銅鏡と阿
里了。應永十四年三月二十三日女院入内。内大臣鏡嚮を用
ふる。なる。見え。近頃賀茂祭の勅使に和鞍ハ見たる
し。銀の鏡銜なり

手綱

物具装束抄ハ手綱事。蘓芳綵公卿殿上人以下四
飾抄ハ公卿蘓芳綵四位已下棟綵と註し。蘓芳の事ハ既ハ
云々。棟綵ハ檮断とも書る。車服制度手記棟綵平緒の條ハ青
断者稱檮断同物候。此平緒者白薄紫相交檮花色似候。五月頃
花咲候。就時節稱檮綵候。正月不可稱檮。可稱青綵候。飾抄ニモ

青綵或稱棟綵ト候。鷹司家装束抄衣笠命云。擗花関比五月許、
着之。而手綱不嫌時節。擗綵青綵紫綵交也云々。已上所見如此、
候然ニ名目抄棟綵平緒訓ハジダント付。擗綵ニチヨダント
訓候。棟擗二字訓皆アフチト和歌ニ用候ハ定事候。殊ニ和名
抄棟字和名阿布知ト候。何トテ誤候ヤラン云々。如是有テ然
了下_テの擗綵平緒の條小。子細註青綵之條候。手綱平緒通候。只
今紺綵手綱多有之候。紺ト白ノ綵候。是ヲ以テ擗綵手綱可被
准知候。ト註し給ヘ里。又紫綵を以用ヒらる事。桃花葉
小見え。諮問抄小。壽永二年二月廿一日。朝覲行幸。中将良經
黒地鞍。小豹下鞍紫綵手綱トあり。又吉槐記乾元二年。八幡御
幸の條小ハ紺の九緒手綱又太平記建武二年ハ幡御幸の條

小ハ。別當藤房卿甲斐大黒ト了。五尺三寸有ける名馬の。太く
逞き小。沃掛地の鞍置。水色厚総鞆小。唐糸の手綱ゆるらる小
掛ふト云る。是ハ和鞍小。きる手綱を以用ヒらるるなるを以し

燈

飾抄和鞍の條小。行幸舌短燈。御幸舌長ト有了。物具装束抄小
ハ。燈大滑時。壺燈。切付時。舌長燈。ト見え。三條装束抄小ハ。保安五年二月十
日。雪見御幸の時。上皇舌長を以用ヒ給ヒ。嘉禎四年三月二十八
日。春日御幸小。左大将壺燈を以用ヒらるトあり。近頃賀茂祭の
勅使於馬小。梨子地の舌長を以用ヒらるト見ゆる事。

逆韃 貫鞆

桃花葉小。力革貫鞆トあり。此力革ハ牛の皮を以制せる

ふる。又し。さす此豹の貫鞞ハ。四位已上の乗具ふし。五位ハ
虎ふるべし。名義ハ力革を貫入る物ふきを以ふ。是を八子と
同物ふらむ。以ふ説ハ。其品を見ざるの故也

鞞

諸書和鞍の具に註する處。連著レム小総コウネ。小畝コウネ連著ふど見えたる。
連著ハ畝の惣躰に透間ふく。総を連著ネ着るを云。其ハ彈正式
又凡六位以下鞍鞞。不得連著スレ。とる父スウラ依り辨ふ。又し。さ
る。或信範記。隨身乗騎の移鞍コ用ふる。衢總の鞞を。連著と
るハ心得難き事也。小総ハ。飭抄コ古鞞コ小総短カ。近代甚
大総長と見えたるを。古制に倣へる物を。後の大総に對ムカへ
小総と呼ヒ。小畝コウネ又大畝オウネ對ムカへる云。畝ハ其躰の畝ムカと依り

此名ふる。又物具裝束抄コ畝鞞と見えたるハ。地チ畝コあ
れ物を云。聞えたる。さす其色ハ緋。或ハ蘓芳紫未濃。又ハ淺
黄ふ。或用ふる事の諸書コ見えたる。但緋ハ彈正式コ茶議
已上。檢非違使別當已下。府生已上。着る事を聽ミる。阿事

鞞

物具裝束抄コ其餘の物コ四保手コのと有る其制作ハ
以ヒてさる。是ハ鏡四保手ふる。近き頃賀茂祭の勅使
の引馬を見ミ。銀の鏡四保手コ用ふる。利

腹帶 表腹帶

桃花葉コ。腹帶コ白由木搦コあり。白ハ延喜左馬寮式コ細布
五尺を。小腹帶料コ註せられ。白布ふる。由木搦コ

事ハ既ふいへり。さて表腹帯ハ玉海。長秋記物具装束抄ふど
みふ。只其名をのこり。制作ハ以てさしむ。唐鞍と同じく
赤地の錦を用ひらるる。今世賀茂祭の勅使引
馬ハ見らる處則其物亦ナリ

差繩

物具装束抄ふ。差々繩。事綾打交差繩。賀茂祭使ナド風流時
用之。白差繩唐鞍和鞍黒移等常用之。有。桃花葉ハ差繩
白二。菊打交。萌木白打交。山吹。紫村濃ふど見ゆ。菊打交ハ蕪芳
と白の打交。萌木白ハ萌木の濃き薄き打交。山吹ハ黄と紅の
打交。紫村濃ハ紫綾也。是等ハ差繩を用ひらるし事の。記録ハ
見えたる。玉海ハ治承二年十一月晦。右少将良通為春日祭

使發向引馬

水精地云々。菊差繩

装束抄ふ大治五年朝覲行幸。少将頼

長萌木白打交治承元年十二月行幸。三位中将山吹。天永三年

春日詣。中納言中将紫村濃とあま。さて此鞍の乗用ふ公卿

ハ諸差繩を用ひらる。さしむ晴儀ふらぬ時ハ。畧き一方

差し。又ハ皆ふら用ひらる。其例ハ吉槐記。乾元

二年正月八幡御幸の條ハ。黒御馬云々差繩一方。差々繩依
非晴儀也

有。葉黄記寛元四年五月廿日。上皇八幡御参籠の條ハ。花山

院三位中将。師継予。淨衣如。常云々黒鞍云々。不。差差繩と見えたり

鞭

飾抄ふ。桃花葉ふど。時繪とあま。是ハ唐鞍ハ用ふる
物と同じまふる。已上和鞍の具也

和鞍



○飾馬考上

○四十三

御幸鞍

諸鞍日記云。御幸鞍の事移形小。赤銅を外小打掛。伏輪を掛多。此金小各が紋打附。切付ハ虎の皮。形ハ行騰切付。表敷ハ錦小包。廣表敷。腹帯ハ下小結び。表敷の上小。表腹帯。革を一寸許小切。錦小包。先小鏡の絞具の様小して打附也。四方手ハ銅の小鞍。赤革小。力革ハ包。大。鏡ハ銅の壺。障泥ハ尺の障泥。馬皮を黒く塗。此鞍ハ御幸の時。公卿殿上人。乘鞍也。云。伊勢氏云。御幸ハ中古已来。院の御出行を云。上古ハ天子の御出行をも御幸と云。然。此鞍ハ天子行幸の日。供奉人。乘故。以。院の御幸。事。

のせ。いと。然。按。先。此。御。幸。鞍。以。名。ハ。此。書。の。外。小。見。え。ざる。小。也。是。以。思。ふ。小。此。日。記。ハ。元。武。藏。國。金。澤。の。称。名。寺。小。秘。持。有。し。物。小。了。所。謂。金。澤。文。庫。の。本。也。遺。聖。傳。を。せ。る。ふ。ら。む。と。以。ふ。説。あり。然。ら。ば。是。ハ。鎌。倉。殿。に。頃。書。ふ。物。小。了。御。幸。鞍。ハ。其。頃。武。家。方。小。了。和。鞍。を。と。ハ。云。ふ。小。未。考。し。思。ふ。其。故。ハ。右。の。鞍。具。の。制。を。考。る。小。鞍。槁。移。の。形。小。了。云。々。以。へ。る。ハ。是。即。挑。花。藻。葉。和。鞍。の。具。小。見。え。たる。赤。銅。鏡。地。の。制。小。了。切。付。ハ。云。々。云。々。是。も。今。の。世。和。鞍。小。用。ふ。る。切。付。ハ。状。少。し。く。行。騰。小。似。たる。物。小。了。表。敷。小。錦。を。用。ふ。る。事。ハ。既。小。云。る。が。如。く。小。了。腹。帯。表。腹。帯。も。右。小。云。處。和。鞍。の。具。小。異。ふ。ら。む。但。鞍。の。制。い。さ。の。違。へ。る。が。如。く。思。ふ。古。和。鞍。小。用。ひ。

しハまる物ふらむる志る處のらむ其故ハ此鞍の鞍形制此
書の外子見えさせバ也。のくろカ革多包^ニた^ニ云る。是ハ貫
鞘をて包めるふ。是又和鞍^ハ用ふる處の製也^{コシラ}。さる^ハ伊勢
氏の何ハ包むや詳^カふらむといさせしハ。よく按^{オモ}むれど^カ
ふる^カ。此餘^{ホカ}燈障泥の制も。皆和鞍の飾^ハ合る^カ上。此諸鞍
日記の中ハ。和鞍^ハ以ふ名の見えざるハ。是此御幸鞍即和鞍
ふる^カの故^ハふらむや。よく思^カふ^カ。然^サを此名ハ行幸御幸の
西義を兼たる^カ。行幸の^カ。以ふ^カハあらむ。さる^ハ院^カ
御幸^カ。和鞍を用ひらせし事の。諸書^ハ見えさせを也。但銜
鞅手綱の事^ハ。此記^ハ洩^カを^カなる^カよく考^ベし

